

論 説



理想を目指して 新たな品質工学の道

—より理解をしていただくために—

Establishment of the Mission, Vision and Shared Values of the Robust Engineering Quality Engineering Society

25周年事業活動委員会*

25th anniversary business activities committee

はじめに

品質工学会では、田口玄一博士の提唱する品質工学の開発・研究を行い、その考え方・手法を提供してきた。昨年9月、25周年を機会に一般社団法人として新たな活動を開始した。ここに未来に向けて学会員が「目指すところ」、「ビジョン」、そして「大切にすること」を理想を目指して新たな品質工学の道としてまとめ、第25回総会において決議した。各項目は会告を見られたい。

本論説は、この決議の内容をより理解していただくことをめざして作成し総会ならびに第25回品質工学研究発表大会で、参加者に配布された小冊子を一部字句を修正し収録するものである。なお決議文の全文は、品質工学会のホームページに掲載する。合わせて参照されたい。本稿では決議文を太字で表示した。

I 目指すところ

品質工学の開発・研究を通じて、あらゆる分野における総合的な評価体系を提供することで以下に貢献します。

品質工学の研究は、品質が「ものやサービス」が出荷後の機能のばらつきと使用・弊害による損失である、とする田口玄一博士の考えを基に始まった。1970年代には、田口博士の指導の下、機能のばら

つきを評価し最適化する知識体系を作り上げる研究が始まった。1980年代には品質工学の体系が徐々にその姿を現すとともに日米において品質工学への関心が高まった。そして1993年には、品質工学の研究者や技術者などの実践者の前途の道をつけるため、有志が集まり研究発表の場を設け、情報交換を行う場として品質工学フォーラムが設立された。今の品質工学会の前身である。その後今日まで25年の間、新しい品質工学の考え、手法を開発しさまざまな場を通じて実証してきた。私たちはこれからも、その考え、手法を発展させていきたい。

人は有史以来「ものとサービス」を作り出し、それを分かち合って今日の文化と文明を作り出してきた。「ものやサービス」は必ず機能を含む。品質工学が対象とする機能は、「ものやサービス」が提供・消費される場所にあり、あらゆる分野が対象となる。

「ものやサービス」を創造し提供するには、研究・開発・設計や生産活動が必要となる。どの活動も、目的を決め、その目的を達成するための考えや手段を考案し、それらの考案が目的に対し十分機能するかを評価している。十分目的に対して働く評価結果を基に判断し、「ものやサービス」を顧客である消費者や使用者に提供する。しかし現実には理想どおり機能せず、さまざまな不具合や故障、欠陥、そして一部は環境問題などの望ましくないことが起きている。そのような望まないことは、結果的に社会損失を生じさせている。

品質工学会では、そのような望ましくないことを防ぐには、「ものやサービス」を研究開発する源流で、評価の質を上げることの重要性に早くから着目

*委員長・吉澤正孝（クオリティ・ディープ・スマーツ（責））